

# 佐賀大学教育学部附属特別支援学校第17期研究1年次のまとめ

## 1 研究テーマ

生活を切り拓く児童生徒の育成を目指して  
～「思考力，判断力，表現力」を引き出す授業作り～

## 2 テーマ設定の理由

本校では「教育実践の成果は，児童生徒の学校生活後の生活の在りように表れる」という思いのもと，児童生徒の実態や特性に応じ，また社会情勢や教育施策を踏まえ，よりよい教育支援の在り方を求め，これまで16期約50年間にわたって，実践研究に取り組んできた。

近年は，平成29年からの学習指導要領改訂の趣旨を踏まえ，カリキュラム・マネジメントを研究の中心に据え，第15期研究では，「児童生徒の確かな学びをつなぐカリキュラム・マネジメントの確立をめざして－明日の授業につながる附特システムの構築－」，第16期研究では「児童生徒の確かな学びをつなぐカリキュラム・マネジメントの確立をめざしてⅡ－『佐大附特システム』の改善と授業実践を通して－」とテーマを設定して研究に取り組んできた。

第15期研究においては，本校におけるカリキュラム・マネジメントの捉えを整理し，実際に推進していくための「佐大附特システム」の構築に取り組んだ。第16期研究においては，学習指導要領に示された各教科の目標と内容を基に，各教科の見方・考え方や系統性の理解及び児童生徒の学びの履歴の把握を目的として，「学習内容表」を作成した。このことにより，児童生徒一人一人の学びの履歴を踏まえた個別の指導計画における目標設定，学ぶべき各教科等の指導内容を踏まえた年間指導計画，単元計画の作成を行うようになり，各教科等の確かな学びを実現するための計画から評価までをつなぐサイクルができた。

この2期の研究を通して，1時間1時間の授業及びそのまとまりとしての単元の中で，児童生徒の確かな学びを実現する方向性が意識されるようになり，次の単元や他の授業，次の学年や次の学部へとつなげていくシステムを構築するという成果を得ることができた。

一方で，「教師がより適切な目標設定と評価ができるように，育成を目指す資質・能力の3つの柱及び評価の3観点について，更に理解を深めるとともに，本校としての評価規準の在り方を検討していかなければならない。」「各教科の内容の確実な習得を図ることを重視しながらも，身に付けた力を生活で発揮しながら自分らしく生きる児童

生徒の育成を目指す授業作りを更に追究していかなければならない。」などの課題が上げられた。

課題の1点目「適切な目標設定と評価の在り方」に関しては、単元計画の評価において「思考力、判断力、表現力」の目標設定及び「思考・判断・表現」の評価が難しいという声が多かった。知的障害のある児童生徒にとっての「思考力、判断力、表現力」に関して、教師が具体的なイメージを十分に描けていない現状や、各教師の捉え方が様々であることの問題点が上げられた。そして、各教師が「思考力、判断力、表現力」の捉え方を整理しないまま授業を実施しているため、これらの力を育成するための有効な手立てを十分に講じることができていないという、教育実践上・学習指導上の課題にもつながっていると考えられる。また、児童生徒のどのような行動や姿をもって、「思考力、判断力、表現力」が育成されたと判断するのか、評価規準についても検討を深めなければならない。

2点目の課題「自分らしく生きる児童生徒の育成を目指す授業作り」に関しては、各教科の内容の児童生徒の習得状況に基づく教育計画がなされるようになった一方で、「児童生徒の将来及び現在の生活をどのように豊かなものにするか」という視点が弱いという課題が上がった。これまで本校でも、学校目標の「児童生徒の現在及び将来の身辺生活・社会生活・職業生活における適応能力を育成する。」を達成するべく、身に付けた基礎的な「知識及び技能」を現在及び将来の生活に活かしながら、児童生徒が自分らしく自立と社会参加を果たしていくことを目指して指導・支援を行ってきた。今期研究においては、課題を踏まえつつ、そこから更に一步進め「自らを生活の主体として生活を切り拓いていく児童生徒」を育てていかなければならないと考えた。

そのためには、児童生徒が生活上の様々な事柄について捉えたことを基に考えた上で、自分なりに選択したり、決定したりすることが必要となってくる。また、児童生徒が創り手となる豊かな社会生活は、自分の思いをもち、それを表現するところから始まる。つまり、児童生徒が自らを生活の主体として生活を切り拓いていくためには、「思考力、判断力、表現力」の育成が必要であると考えた。

そこで、今期研究は、育成を目指す資質・能力のうち、「思考力、判断力、表現力」に焦点を当てて、研究を進めていくこととした。研究を進めるにあたっては、これまでの単元計画の評価の分析や職員意識調査により、上記の課題について整理するなど、現状の課題の整理から始めることとする。

その上で、知的障害のある児童生徒にとって「思考力、判断力、表現力」とはどのような力なのかについて教師間の共通理解を深めていく。子どもの認知の発達に関する理論研究等をしっかり抑え、児童生徒一人一人について、身に付けたい「思考力、判断力、表現力」について検討していきたい。また、そのような検討を踏まえた上で、単元

計画作成における単元目標や個人目標を設定し、評価規準に基づく評価や、授業改善を行っていききたい。

「思考力、判断力、表現力」についての適切な目標及びその評価規準の設定の次に、目標を達成するための指導・支援の在り方について検討を深めていく。これまでも本校では、一人一人の実態に応じたできる状況作りについて研究を進め、適切な手立てを準備し児童生徒の主体的な活動を引き出すという実践を積んできた。そのような土台の上に、今期研究では、児童生徒の「思考力、判断力、表現力」を引き出す授業作りに焦点を当てて研究を進めていく。まずは、児童生徒が授業における主体であるという原点に立ち返り、目に見えない「児童生徒の心の動き」を捉え、児童生徒が、より深く考え、自信を持って判断し、意欲的に表現するために、教師はどのように指導・支援していくべきかについて考えていききたい。

以上のことから、今期研究のテーマを「生活を切り拓く児童生徒の育成を目指して～『思考力、判断力、表現力』を引き出す授業作り～」と設定した。

### 3 研究目的

現在及び将来の生活に関心を向け、自ら考え、自分らしくよりよく生きていこうとする「生活を切り拓く児童生徒」を育むために、適切な実態把握と目標設定－授業実践－評価のサイクルの中で、児童生徒の多様な「思考力、判断力、表現力」を十分に引き出し、一人一人が主役となる授業作りの在り方を探る。

### 4 研究内容

- (1) 「思考力、判断力、表現力」の育成に関する課題の整理
- (2) 「思考力、判断力、表現力」の捉えの整理と評価の在り方の検討
- (3) 「思考力、判断力、表現力」に焦点を当てた授業実践

## 5 研究方法

- (1) 「思考力，判断力，表現力」の育成に関する課題の整理
  - ア 令和3年度単元計画の「思考・判断・表現」の評価を分析する。
  - イ 「思考力，判断力，表現力」の育成に関する職員意識調査を行う。
  - ウ 「思考力，判断力，表現力」の育成に関する課題を整理する。
- (2) 「思考力，判断力，表現力」の捉えの整理と評価の在り方の検討
  - ア 知的障害教育における「思考力，判断力，表現力」について各種文献や先行研究から学ぶ。
  - イ 「思考力，判断力，表現力」の育成に向けた指導・支援の指針を策定する。
  - ウ 評価基準の設定をはじめとする「思考・判断・表現」の評価の在り方を検討する。
- (3) 「思考力，判断力，表現力」に焦点を当てた授業実践
  - ア 整理した「思考力，判断力，表現力」の課題を踏まえた，授業研究を行う。
  - イ 「思考力，判断力，表現力」の育成に有効な指導・支援を明らかにする。

## 6 研究計画

研究計画は，以下のように計画を立てて，取り組む。

	令和4年度	令和5年度	令和6年度
4月	研究計画	文献研究・理論研究	捉えや評価についての検討
5月	↓	理論研究に沿った	↓
6月	↓	研究授業を年間通して	↓
7月	課題の整理	実施する（G別）	↓
8月	↓ （高等部県特研発表）	↓ （中学部九附連発表）	授業研究
9月	↓	↓	↓
10月	授業研究		
11月	↓ （高等部九特研発表）	↓	↓ 研究紀要作成
12月	↓	↓	↓
1月	令和4年度公開授業研究会	令和5年度公開授業研究会	第21回 研究発表会
2月			
3月	1年次研究のまとめ	2年次研究のまとめ	第17期研究のまとめ

## 7 研究の実際

### (1) 「思考力、判断力、表現力」の育成に関する課題の整理

今期研究を進めていくにあたって、まず、本校の「思考力、判断力、表現力」の育成に関する状況を把握し、課題の整理から取りかかることとした。

課題の整理は、「令和3年度に作成した単元計画の『単元の個人目標の評価』のうち、『思考・判断・表現』の評価を分析する方法」と、「児童生徒の姿・普通の授業における支援等に関する職員意識調査を集約し分析する方法」の2つの方法で行うこととした。

#### ア 令和3年度単元計画の「思考・判断・表現」の評価を分析する。

単元計画の評価を分析するにあたっては、評価をいくつかの項目に分類した上で割合などの傾向を読み取り、その背景等を職員間で検討することとした。

分類の項目を設定するには、「思考力、判断力、表現力」の捉えを整理する必要がある。そこで、まず法的根拠等を確認しながら、「思考力、判断力、表現力」とはどのような力であるかを協議した。

学校教育法第30条2項には「生涯にわたり学習する基盤が培われるよう、基礎的な知識及び技能を習得させるとともに、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくみ、主体的に学習に取り組む態度を養うことに、特に意を用いなければならない。」と表記されている。また、学習指導要領（特別支援学校小学部・中学部学習指導要領）には、第1章総則第2節中に、「(1)基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させ、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力等を育むとともに（後略）」の記述がある。これらには、「思考力、判断力、表現力」について「習得した知識及び技能を活用して課題を解決するために必要となる力」と示されている。この『「知識及び技能」を活用して課題を解決するために必要な力』の文中の、特に「課題を解決する」をキーワードとしながら、検討を進めていった。

学習指導要領解説（総則編）では、「知識及び技能を活用して課題を解決する」過程を「事物の中から問題を見だし、その問題を定義し解決の方向性を決定し、解決方法を探して計画を立て、結果を予測しながら実行し、振り返って次の問題発見・解決につなげていく過程」「精査した情報を基に自分の考えを形成し、文章や発話によって表現したり、目的や場面、状況等に応じて互いの考えを適切に伝え合い、多様な考えを理解したり、集団としての考えを形成したりしていく過程」「思いや考えを基に構想し、意味や価値を創造していく過程」と示している。また、今回の学習指導要領改訂につながる中央教育審議会での言語能力の向上に関する特別チームでは、審議資料として『「思考力・判断力・表現力等」についての整理のイメージ』が提示された。その中で「問題発見・解決のプロセス」の中で働く「思考・判断・表現」（図1）が示された。

この「課題解決のプロセス」で働く「思考」「判断」「表現」を、「思考・判断・表現」の評価を分類する項目として設定し、評価分析シートを作成することとした。

なお、特別支援教育においては、いわゆる「発問」から始まり「問いへの回答」をゴールとする学習スタイルだけではなく、「生活上の課題に対してその解決に向けて取り組む」「興味・関心を軸に取り組みたいテーマを見出し、活動を積み重ねる」という学習スタイルを取ることも多いため、「問題発見・解決のプロセス」ではなく「課題解決のプロセス」と表現した。

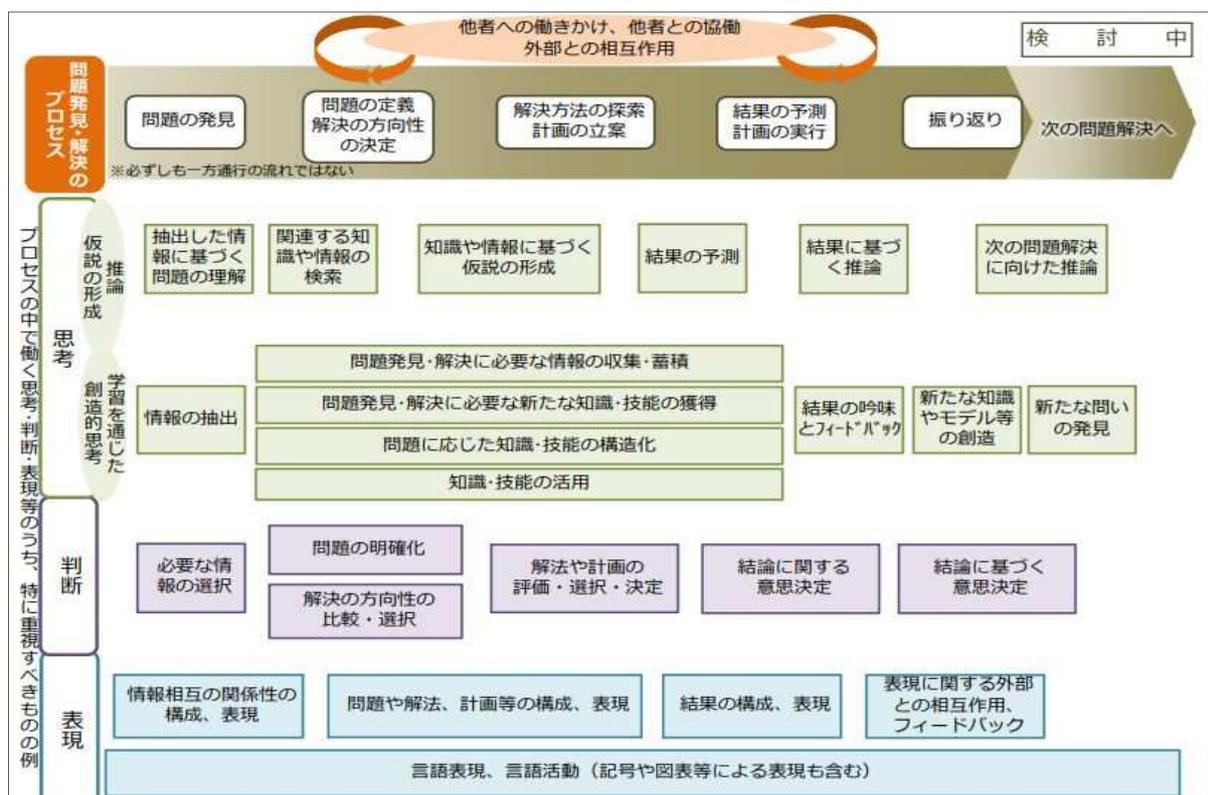


図1 「問題発見・解決のプロセス」の中で働く「思考・判断・表現」

「課題解決のプロセス」は授業の展開とも関連させて、「課題の発見」「解決の方向性の決定と解決方法の計画・実行」「結果の受け止めと振り返り」と設定した。

それぞれの「課題解決のプロセス」中の「思考」「判断」「表現」について、単元や授業における具体的な力を明らかにする必要があると考えた。まず、「判断」や「表現」の土台となる「思考」について、先行研究から学ぶこととした。

新潟大学教育学部附属新潟小学校の研究では、思考の具体的な働きが「思考の方法」として動詞で示された。さらに児童が「思考の方法」を使用しやすいように「思考のことば」も示された。授業の中で、児童が様々な思考の言葉を用いながら、様々な思考の方法によって問題の解決に取り組むことができるような、授業の在り方について実践研究が進められた(表1)。

表1 思考の方法とことば

思考の方法	思考のことば
○仮定する	「もし～ならば、～となる」
○推量する	「～は、○○になっている。だから、～は△△なのではないか」
○比較する	「○○と△△を比較して、その違いから～がわかる」
○視点（立場）、あるいは視点を 変える	「もし～の視点（視点・角度・理論・立場）から見たら、どうなるだろうか」
○共通の基準で見る	「～にあてはめると～になる」
○関係付ける	「○○と△△がどのように関係しているのか」 「～の原因として、どんなことが考えられるだろうか」
○帰納的に見る	「A, B, C から、～のきまりがいえる」
○類推する	「～でうまくいったので、～でも、うまくいくであろう」
○演繹的に見る	「～のきまりから D が説明できる」
○拡張する	「他にもっとよいやり方はないかな」 「では、～の場合はどうなるだろうか」
○焦点化する	「まずできるだけたくさん可能なものを挙げて、その中から、一番よいものを選んでみよう」
○逆発想する	「もし～でなく、その逆（反対）であったらどうなるだろうか」
○再分類・再編成する	「他の基準で分類したらどうなるだろうか」 「構成要素は何であるか、もう一度見直してみよう」
○加減する	「～の時は、何を使ったら、よいかな」 「もし～がなかったとしたら、どうなるだろうか」
○変換する	「大きさ（長さ・重さ・体積・傾きなど）が変わったら、どうなるかな」
○具象化する	「図を書いて考えてみてはどうか」
○連想する	「～と似たものにどんなものがあるだろうか」

次に、栃木県総合教育センターの論考を見てみると、「思考力・判断力・表現力の育成に関する調査研究」において、「比較」「分類」「関係付け」「理由付け」4つの「思考のすべ」を提唱している（図2）。普段の授業の中で児童生徒が「思考のすべ」を使うような発問等を行い、「思考力」を効果的に高める授業研究も行われた。

図2 思考のすべ

<b>比較</b>	ある視点に従って、複数の事象（情報）の共通点や相違点を明らかにすること
<b>分類</b>	ある視点に従って、複数の事象（情報）をグループ分けすること
<b>関係付け</b>	既習事項や経験と事象（情報）、または二つの事象（情報）どうしを結び付け、意味付けること
<b>理由付け</b>	考えや意見の根拠を明示すること

2001年にアンダーソンらにより、教育目標を分類し明確に記述する枠組みとしての「ブルーム・タキソノミー」の改訂版が提唱された。その中で認知領域として「記憶」「理解」「応用」「分析」「総合」「評価」の6つが上げられている。さらにそれらを説明する項目も示された（表2）。これらの認知領域や項目として上げられた動詞の文言も、私たちが「思考力」を理解する上で参考とすることができると思った。

表2 改訂版ブルーム・タキソノミー

Remember	Recognizing 見分ける・認識する	Analyze	Differentiating 違いをみつける
	Recalling 取り出す（持ち出す）		Organizing 統合・統一する
Understand	Interpreting 解釈する		Evaluate
	Exemplifying 例示する	Checking 照合・確認する、気づく	
	Classifying 分類する	Critiquing 批判・判断する	
	Summarizing まとめる	Create	Generating 生成する
	Inferring 演繹する		Planning 計画・デザインする
	Comparing 比較する		Producing 生産する
	Apply	Explaining 原因と結果を説明する	
Executing 実行する			
	Implementing 具現化する		

以上のような資料や先行研究を参考として、評価分析シートを作成した（表3）。評価分析シートでは、それぞれの「課題解決のプロセス」で働く「思考」「判断」「表現」を、①から⑯の項目で示した。また、①～⑯の項目に当てはまらない記述内容を挙げるスペースや、「思考・判断・表現」と受け取ることができない表現の記述を書き留めておくスペースも設けた。

評価分析シートを使用し、令和3年度の全単元計画について、個人目標の評価の「思考・判断・表現」の評価の記述が①～⑯のどれに分類されるのか、グループに分かれて検討を行った。その分類の結果から見えてきたことや、考えたことなどをグループ内で意見交換した。

表 3 評価分析シート

課題解決 プロセス	思考 判断 表現	通 し 番 号	具体的な力	カウント	備考	
課題の 発見	思考	①	関連する情報を検索する			
	判断	②	必要な情報を選択する			
解決方法の 方向性の 計画・決定 と 実行	思考	③	解決に必要な情報を検索する			
		④	解決方法を考える			
		⑤	考えを比較する			
		⑥	結果を予測する			
	判断	⑦	解決の方向性を決める			
		⑧	解決に向けて計画する			
	表現	⑨	考えたことを表現する			
		⑩	計画を実行する			
	結果の 振り返り 止めと	思考	⑪	解決方法を振り返る		
			⑫	他の方法を考える		
⑬			次の課題を発見する			
判断		⑭	結果に基づいて意思決定する			
		⑮	結果を評価する価値付けする			
表現		⑯	結果を表現する			
どれにも当てはまらない						
①から⑯にあてはまらない			記述	備考		
「思考・判断・表現」では ない			備考			

令和3年度、小学部では各学級(2学年ごとの複式学級の計3学級)の生活単元学習、音楽、図画工作、体育で作成し、サーバー上のデータと紙媒体のファイル(図3)で保存した。中学部では、作業学習、生活単元学習(学年別)、国語、数学、音楽、美術、保健体育で、高等部では作業学習、生活単元学習、国語、数学、音楽、美術、保健体育、職業で作成した(表4)。



図3 単元計画ファイル(小学部)

表4 各学部単元計画ファイル一覧

小学部 12冊	生活単元学習	4つの授業についてA・B・Cの各クラス別
	音楽	
	図画工作	
	体育	
中学部 9冊	生活単元学習	各学年
	作業学習	3作業種で1冊
	国語	縦割り3グループで1冊
	数学	縦割り3グループで1冊
	学部音楽	各1冊
	学部美術	
	学部保健体育	
高等部 8冊	生活単元学習	学部で1冊
	作業学習	4作業種で1冊
	国語	縦割り3グループで1冊
	数学	縦割り3グループで1冊
	職業	2グループで1冊
	学部音楽	各1冊
	学部美術	
	学部保健体育	

分析の対象である単元計画では、児童生徒一人一人に単元の個人目標の設定を行っているおり、育成を目指す資質・能力の3つの柱のうち、中心となるものを1つ取り上げるようにしている。そして、評価の段階において、「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学習に取り組む態度」の3つの観点別に、単元の中で見ることができた児童生徒の学びの姿を記述している。

評価分析シートを用いて単元計画の「思考・判断・表現」の評価を分類した結果は、次のとおりである(表5)。

表 5 単元計画評価の分類結果

課題解決プロセス	思考判断表現	通し番号	小学部		中学部		高等部		合計	
			合わせた指導	教科別の指導	合わせた指導	教科別の指導	合わせた指導	教科別の指導		
課題の発見	思考	①	2	3	14	4	4	0	27	
	判断	②	13	4	15	6	9	19	66	
解決の方向性の決定と 解決方法の計画・実行	思考	③	3	4	12	7	40	20	86	
		④	38	53	42	26	65	49	273	
		⑤	12	7	14	8	19	4	64	
		⑥	0	11	9	18	4	5	47	
	判断	⑦	16	39	32	4	21	8	120	
		⑧	1	5	6	12	20	10	54	
	表現	⑨	69	103	134	59	67	83	515	
		⑩	20	39	63	15	25	38	200	
	結果の受け止めと 振り返り	思考	⑪	0	1	1	3	0	1	6
			⑫	0	6	3	3	18	11	41
⑬			0	0	0	2	0	0	2	
判断		⑭	3	7	6	5	4	19	44	
		⑮	1	6	3	3	0	0	13	
表現		⑯	6	14	11	5	3	11	50	
合計									1608	

今回、集計を行った全目標数は3,281だった。その内「思考・判断・表現」の評価の記述があったものは1,581の48.2パーセントだった。このうち「～たり，～たりすることができた。」や「〇〇と考えたことを〇〇と表現した。」など1つの記述に2センテンスの

評価があったものについては、ダブルカウントをしており、「思考・判断・表現」の評価の総数は1,608であった。その他の1,700の518パーセントは、「思考・判断・表現」の記述欄が空白のものや、「知識・技能」、「主体的に学習に取り組む態度」の内容と判断されるものであったりした。さらに、「何度か繰り返して取り組むことで、活動内容を理解して、参加することができた。」など児童生徒が内面を働かせている場面を評価していると捉えられるが、①から⑯の項目に振り分けられなかったものもあった。

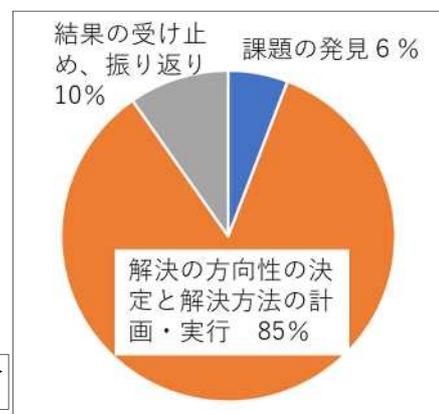
分類の結果について、まず、評価の記述欄が空白だったものについては、児童生徒の単元への参加が十分ではないことや、児童生徒が単元の中で見せる学習の姿から、教師が「思考・判断・表現」の観点で見取って評価を行うことができなかったということが理由として上げられた。

次に「知識・技能」の評価が、「思考・判断・表現」の評価欄に記述されていることについては、「知識・技能」の評価も、児童生徒の思考や判断の結果が表現されて初めて教師が捉えて可能となるため、そのような混同が起りやすいと考えられた。

「主体的に学習に取り組む態度」の評価が、「思考・判断・表現」の評価欄に記述されていることについては、その単元における「思考・判断・表現」の見取りが難しかったのに加え、「主体的に学習に取り組む態度」につながる児童生徒のよい面を積極的に評価し記録しておきたいという教師の思いがあったためではないかと話し合った。

評価分析シートの分類結果の①から⑯まで値を「課題解決のプロセス」の3つのプロセスごとに合計し、割合を明らかにした(図4)。課題解決の3プロセスの割合としては、「解決の方向性の決定と解決方法の計画・実行」のプロセスが85パーセントと圧倒的に多く、「課題の発見」や「結果の受け止めと振り返り」のプロセスとの差が大きいことが分かった。

図4 「課題解決のプロセス」ごとの割合



このことについては、実際の授業では「課題の発見」や「結果の受け止めと振り返り」に関する取組も行っており、「児童生徒が調べ学習をする姿や、振り返り学習で次に頑張りたいことなどを発表する姿から評価が可能であったが、単元の個人目標に照らして、単元の中心的な活動についての評価を記述するようにしているので、『解決の方向性の決定と解決方法の計画・実行』が多くなる結果になった」という意見が上がっていた。同時に、反した見方にはなるが、「授業を思い返してみると、児童生徒が混乱なく課題を把握することを重視したために、自分で課題を発見したり、取り組む内容を決めたりする機会を設けていなかった。」や「振り返り活動を行っても、毎回決まった感想を発表するなど、生徒が自分の学習を評価したり、次の活動につなげたりするまでの、踏み込んだ取組にはなっ

いなかった。」などの意見も出された。

単元計画を作成する際は、単元の個人目標を「育成を目指す資質・能力」の内、中心的なものを1つ設定するようになっているので、単元を中心となる学習活動が「解決の方向性の決定と解決方法の計画・実行」となることが多いことを踏まえれば、単元の個人目標の評価が分類結果のようになることは妥当であると考えられる。

次に評価分析シートの分類結果の①から⑯まで値を「思考」「判断」「表現」ごとに合計し、割合を明らかにした(図5)。課題解決のプロセスを跨っての「思考」「判断」「表現」に着目すると、「表現」が多いことが明らかになった。

このことについて、「図工や音楽、体育などの教科は、表現することが単元の目標となっているためカウントが多くなる。」や「児童生徒が行動として表出したものを『表現』と見取って評価しているが、音楽や体育などは『知識・技能』として評価するべきものもあったのではないか。」などの意見が出された。

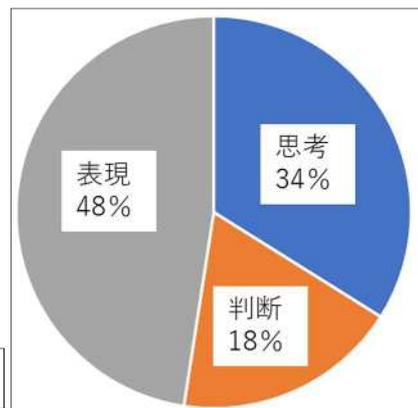


図5 「思考」「判断」「表現」の割合

「児童生徒が表したいと思いつかべたこと(思考)から、これを表そうと決めて(判断)、『知識・技能』を活用しながら表し方を工夫して(思考)、表現している(表現)」というように、児童生徒は実際には様々な力を複合的に使いながら学習している。そのため児童生徒の学ぶ姿から、「知識・技能」「思考」「判断」「表現」のどの力が育成されていると判断するかは、教師がその学習において何の力の育成を目指しているのかによって異なる。適切な学習評価を行うためには、単元計画の目標設定の段階において育成を目指す資質・能力の3つの柱を教師が明確に意識しておく必要があることが明らかになった。

次に、評価分析シートの分類結果の値の「課題解決のプロセス」ごとの割合と、「思考」「判断」「表現」ごとの割合について、学部間で比較を行った。

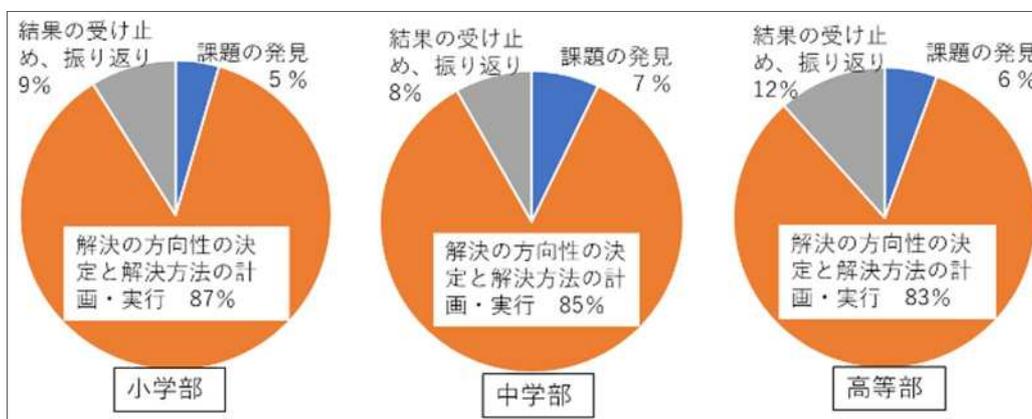


図6 「課題解決のプロセス」ごとの割合の学部間比較

学部間の「課題解決のプロセス」ごとの割合の比較においては、小学部・高等部と移行するにつれ、「解決の方向性の決定と解決方法の計画・実行」の割合が減少し、「課題の発見」や「結果の受け止めと振り返り」が増加していることが分かった（図6）。

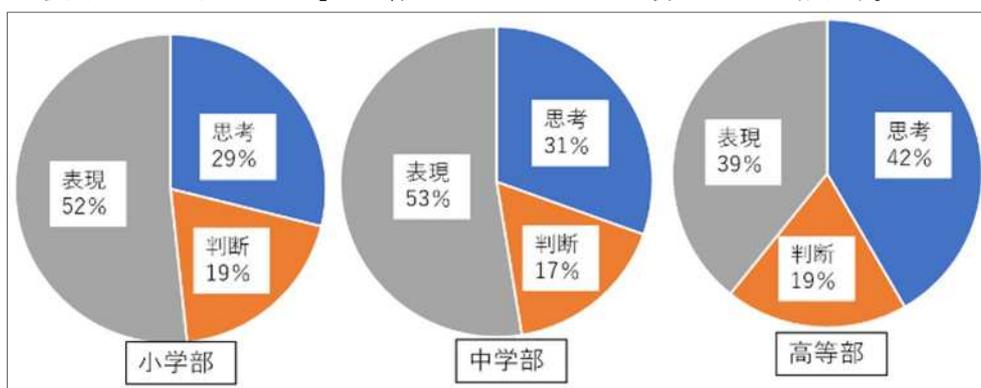


図7 「思考」「判断」「表現」ごとの割合の学部間比較

「思考」「判断」「表現」における割合の学部間の比較においては、小学部と中学部に大きな違いは見られなかったものの、高等部では、「思考」が増加しその分の「表現」が減少していることが分かった（図7）。

このことについては、高等部の授業で、考える活動を意図的に多く実施していることが考えられる。さらに、知的発達や意思伝達のスキル獲得により、生徒のコミュニケーションや言語使用に関する能力が高まるため、自分の考えたことを書いたり話したりして伝えることができるようになってきていることや、それにより教師が生徒の「思考していること」を把握しやすくなったことなどが背景として考えられるのではないかと話し合った。

最後に、評価分析シートの分類結果の値の「課題解決のプロセス」ごとの割合と、「思考」「判断」「表現」ごとの割合について、「各教科等を合わせた指導」と「教科別の指導」の指導形態間で比較した。両者とも大きな差異は見られなかった（図8, 図9）。

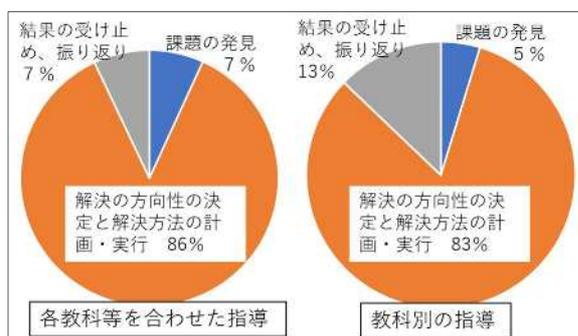


図8 「課題解決のプロセス」ごとの割合の指導形態間比較

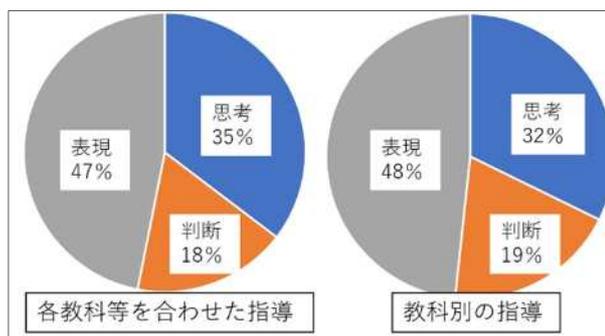


図9 「課題解決のプロセス」ごとの割合の指導形態間比較

しかし、指導形態ごとの「思考・判断・表現」の評価の分類をしながら、以下のような様々な意見が出されていた。

- ・「各教科等を合わせた指導」では、「教科別の指導」で身に付けた「知識及び技能」を活用して生活上の課題解決に取り組めるように、「思考力、判断力、表現力」を育成するような授業づくりを心がけてきたので、「思考・判断・表現」の割合が多くなるのではないか。
- ・「各教科等を合わせた指導」では、実生活で必要となる基礎的な力を身に付けるような単元を設定してきたので、「知識・技能」の確実な定着を図り、その評価はできていた。その分、「思考・判断・表現」の指導や評価は不十分だったのではないか。
- ・実際の授業においては、「教科別の指導」では、教科の見方・考え方に基づく活動の設定や発問などがしやすかったが、「各教科等を合わせた指導」においては、目標設定も評価も難しかった。
- ・分類の結果について、数値上に有意な差がなかったということは、「各教科等を合わせた指導」であっても、取り扱う教科を組み合わせているのみで、「教科別の指導」と同じような授業作りをしていることの表れではないだろうか。

「各教科等を合わせた指導」は、「児童生徒の学校での生活を基盤として、学習や生活の流れに即して学んでいくこと(特別支援学校学習指導要領解説各教科等編)」をねらっているため、その中で育成される「思考力、判断力、表現力」も生活上の課題を解決したり、生活をよりよいものにしたりするような力であると考えられる。生活を踏まえた「思考力、判断力、表現力」は、教科の枠を超えた総合的な力であったり、一見するとどの教科の見方・考え方に裏打ちされるものか分かりにくかったりする。実際の「各教科等を合わせた指導」の授業においては、この生活を踏まえた「思考力、判断力、表現力」を、各教科で示された育成を目指す資質・能力の「思考力、判断力、表現力」に読み換え、単元の目標を設定した上で授業実践と評価につなげる必要がある。「教科別の指導」とは、授業作りの手順や考え方が異なっている点が、「各教科等を合わせた指導」における「思考・判断・表現」の評価の難しさや、教師間による捉えの相違の理由になっているのではないかと考えられた。

「各教科等を合わせた指導」は、本校の教育課程において65パーセント程度を占める重要な学習となっているので、「各教科等を合わせた指導」における「思考力、判断力、表現力」の目標設定や評価の在り方については、教師間で十分に検討し、共通理解を深める必要がある。

## イ 「思考力、判断力、表現力」の育成に関する職員意識調査を行う。

「思考力、判断力、表現力」の育成に関する課題の整理について、2つ目の方法として、職員の意識調査を行い、回答を持ち寄ってグループで検討を行った。調査項目を「①児童生徒の普段の姿を見て、こんな『思考力、判断力、表現力』が足りていないと考えること。」

「②今後伸ばしていきたい『思考力、判断力、表現力』」「③『思考力、判断力、表現力』を伸ばしていくにあたって、有効な指導・支援」「④将来及び現在の生活において、身についた『思考力、判断力、表現力』を発揮してどのように過ごしてほしいと考えるか。」と設定した。

調査項目①②は各教師の回答を基にしたグループ協議の中で「足りてないと思うから、やっぱり伸ばしていきたい。」「児童生徒にとって必要な力だと思うからこそ、足りないと感じる」など、表裏一体の形で検討されていた。また回答の中には、「思考力、判断力、表現力」そのものではなく、「思考力、判断力、表現力」を育成する土台となると捉えられるものが出されていた。③については、現在行っている支援の工夫点としての意見もあったが、多くは「もっとこのような支援を行っていく必要があるのではないか。」といった課題意識をもって協議された。なお、④の回答は十分に得られず、協議もなかなか深まらなかったという課題が残った。

以上のような職員意識調査の回答内容やグループでの検討内容等を集約し、「伸ばしていきたい『思考力、判断力、表現力』」「『思考力、判断力、表現力』を支える学びに向かう力」「『思考力、判断力、表現力』を伸ばしていくための教師の支援の在り方」としてまとめることができた。

まず、伸ばしていきたい「思考力、判断力、表現力」については、周囲の事物や変化に気付く力、ちょっと先の事象を想像したり、行動の結果を予測したりする力などの「周囲の事象の捉え」に関するもの、優先順位をつけるなど条件に応じて計画する力、遂行途中でも状況に合わせて計画を変更したり、立て直したりする力などの「課題解決に向けた計画」に関するもの、様々な方法でコミュニケーションをとる力、自分から相談する力などの「コミュニケーション」に関するもの、自分の活動や学習を振り返り評価する力や、自分の思いや考えを調節しながら友達と協力して解決に取り組む力などの「自分の思いや考えの調節」に関するものとしてまとめられた（表6）。

表6 職員意識調査 伸ばしていきたい「思考力、判断力、表現力」

伸ばしていきたい「思考力、判断力、表現力」	
「周囲の事象の捉え」に関するもの	周囲の物事や変化に気付く力
	周囲の状況を受け止め、対応しようとする力
	相手の伝えようとすることや言葉・文章や記号等が意味することを受け止め、対応しようとする力
	ちょっと先の事象を想像したり、行動の結果を予測したりする力
	出来事や行動の理由や背景を説明する力
	事物の共通の特徴に気付いたり、特徴に基づいて分類したりする力
「課題解決に向けた計画」に関するもの	課題解決に向けて計画する力
	優先順位をつけるなど条件に応じて計画する力
	遂行途中でも状況に合わせて計画を変更したり、立て直したりする力
	試行錯誤しながら解決に取り組む力
「コミュニケーション」に関するもの	伝えたいことを発信する力
	様々な方法でコミュニケーションをとる力
	依頼の場面等で、困っていることや必要な支援について説明する力
	自分から相談する力
「自分の思いや考えの調節」に関するもの	もっている知識や技能を他の学習や場面でも使う力
	自分の活動や学習を振り返り、評価する力
	自分の考えと他者の考えを見比べる力
	自分の思いや考えを調節しながら友達と協力して解決に取り組む力

次に「思考力、判断力、表現力」を支える学びに向かう力については、周囲の事物や人に関心に向けようとする、粘り強くチャレンジを続ける、間違いや失敗を恐れずチャレンジするなどがあり、「主体性」「向上心」「意欲」「粘り強さ」などがキーワードとして上げられた（表7）。

表7 職員意識調査 「思考力、判断力、表現力」を支える学びに向かう力

「思考力、判断力、表現力」を支える学びに向かう力
自分から行動を起こそうとする力
周囲の人と関わり、他者と気持ちを通じ合わせようとする力
周囲の事物や人に関心に向けようとする力
人任せではなく、自分で課題を解決しようとする力
間違いや失敗を恐れずチャレンジする力

粘り強くチャレンジを続ける力
よりよいものにしよう, 向上しようとする力
自分の選択や決定に対して, 自分で責任をもとうとする力
興味・関心を深めたり広げたりしようとする力

最後に教師の支援の在り方については, 課題を自分で見付けたり選択したりする場面を設定すること, 児童生徒が一人で任される場面を設定することなどの「活動内容や授業展開の工夫」に関するもの, 思考や感情や様子など児童生徒が表現したいことが適切に伝わるような選択肢を準備することや, 様々な手段による発信に適切に応じることなどの「コミュニケーション支援」に関するもの, 児童生徒の思いや考えを一緒に整理していくような会話ややりとりをしたり, 様々な考えを尊重し, 途中で意見が変わることも肯定的に捉えたりすることなどの「教師の関わり方の姿勢」に関するものとしてまとめられた(表8)。

表8 職員意識調査 教師の支援の在り方

教師の支援の在り方	
「活動内容や授業展開の工夫」に関するもの	心を動かす(発見や驚きや感動のある)様々な経験を積めるように支援する。
	好きなことを見付けたり,好きなことを追究して深めたりすることができるように支援する。
	必要な情報を自分で探したり,多くの情報から必要なものを選択したりできるように支援する。
	課題を自分で見付けたり選択したりする場面を設定する。
	「できた」「次はこうしよう」と肯定的に自分の学習を振り返ることができるように支援する。
	児童生徒の思いや発想が反映される授業づくりをする。
	児童生徒が任される場面を設定する。
	児童生徒の興味・関心や強みが生かされるような授業づくりをする。
	具体物を操作するなど,作業とそのフィードバックを繰り返して考えを深めることができるように支援する。
	ロールプレイングなどを取り入れ,実際の場面で生かされるように経験的な活動を仕組む。
	教室の中や学校の中だけでなく,地域で学ぶ機会を作る。
	児童生徒がもう一歩努力したり,工夫したりすることで達成できるような課題を設定する。

「コミュニケーション支援」に関するもの	自分以外の人の気持ちや、相手が伝えたいことに注意や関心を向けられるように支援する。
	児童生徒の思考や考えを適切に読み取る。
	思考や感情や様子など児童生徒が表現したいことが適切に伝わるような言葉の習得を図る。
	思考や感情や様子など児童生徒が表現したいことが適切に伝わるように、選択肢を準備するなどの支援を行う。
	様々な手段による児童生徒の発信に適切に応じる。
「教師の関わり方の姿勢」に関するもの	オープンクエスチョンなど、児童生徒が考えるような言葉掛けや発問をする。
	答えではなく、考える方法を伝える。
	迷ったり悩んだりする時間を確保し、児童生徒に寄り添う姿勢で接する。
	児童生徒の思いや考えを一緒に整理していくような会話ややりとりをする。
	児童生徒の考えを尊重し、途中で意見が変わることも肯定的に捉える。

### ウ「思考力、判断力、表現力」の育成に関する課題の整理

ア、イでは、令和3年度の単元計画の評価を分析し検討する方法と、職員の意識調査を行い、その内容を検討する方法で整理した「思考力、判断力、表現力」の育成に関する課題を以下の図のようにまとめることができた（図10）。

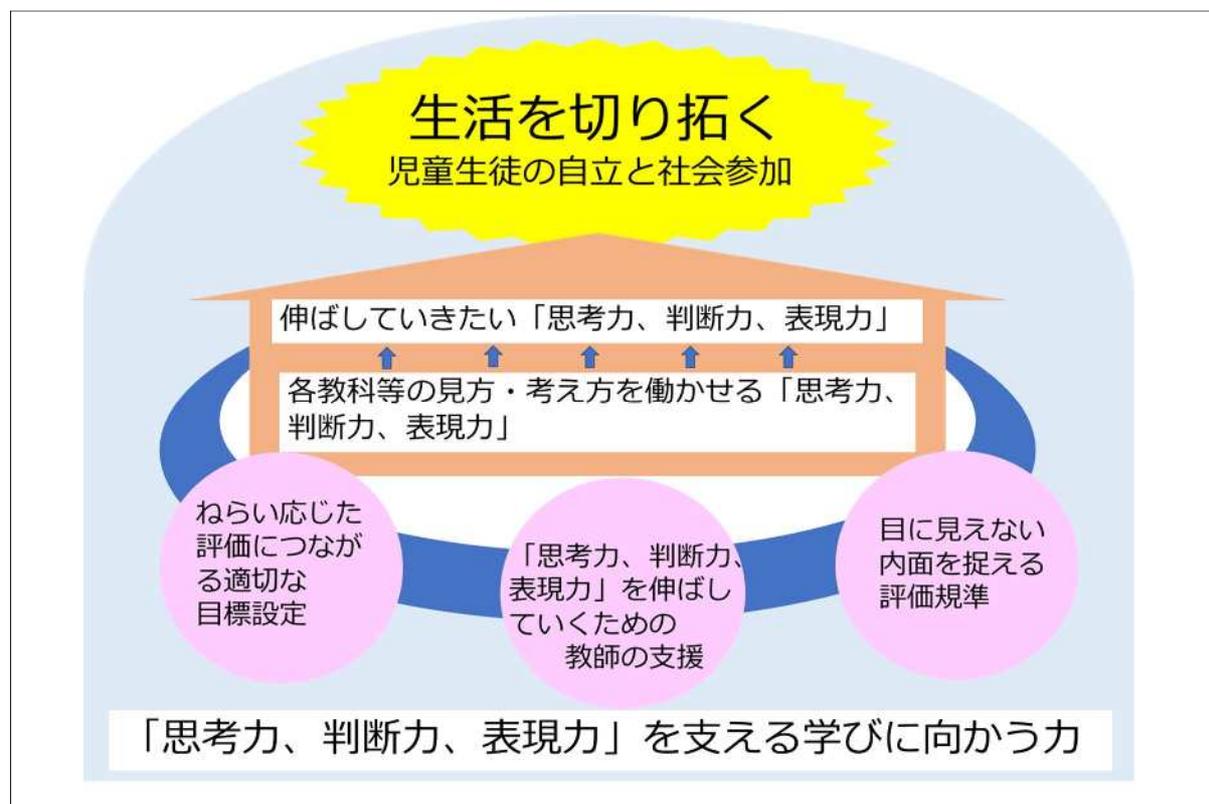


図10 「思考力、判断力、表現力」の育成に関する課題

職員意識調査の分析により、まず、伸ばしていきたい「思考力、判断力、表現力」を上げることができた。これらの「思考力、判断力、表現力」は研究テーマの設定にも述べたように、自立と社会参加を目指して、児童生徒が自ら生活を切り拓く力となるような「思考力、判断力、表現力」でなければならない。今回上げたものが、そのような力となるのか、授業実践を通して検討を深めていきたい。

授業においては、各教科の見方・考え方を働かせる「思考力、判断力、表現力」の育成が求められ、本校でも単元の目標設定をその視点で行っている。今期研究テーマにもある「生活を切り拓く」に結びつく「伸ばしていきたい『思考力、判断力、表現力』」が、即「教科の見方・考え方を働かせる『思考力、判断力、表現力』」であるとは捉えていない。双方の関係性については、改めて検討していかなくてはならない。関係性を整理した上で、カリキュラム・マネジメントにおける各計画の中の位置付けや目標設定・評価・評価の在り方についても整理していく必要がある。

次に、児童生徒の「思考力、判断力、表現力」を育成する授業づくりの課題について考えていきたい。単元計画の評価分析による課題の整理により、適切な指導・評価を行うた

めには、「思考力、判断力、表現力」の視点での目標設定を含めた、育成を目指す資質・能力の3つの柱に沿った目標設定が必要だということが分かった。さらに、児童生徒の心の動きとしての思考力と判断力を、どのような姿をもって「発揮している。」と見取ることができるのかという評価規準の在り方についても課題であることが分かった。これらを具体的には、どのように実践していくかを検討していく必要がある。

また、授業作りや児童生徒一人一人への手立ての工夫など、「思考力、判断力、表現力」を伸ばしていく教師の支援の在り方についても、検討していかななくてはならない。

## (2) 「思考力、判断力、表現力」の捉えの整理と評価の在り方の検討

今期研究2年度となる来年度のグループ研究では、「思考力、判断力、表現力」の捉えの整理に取り組んでいきたい。また、3年次の令和6年度は「思考・判断・表現」の評価について評価規準の設定などの指針を本校として作成できるよう検討を進めていきたい。

### (3)「思考力、判断力、表現力」に焦点を当てた授業実践

#### ア 整理した「思考力、判断力、表現力」の課題を踏まえた授業研究を行う。

(1年次 10月～)

(1)において整理された「思考力、判断力、表現力」の育成に関する課題を踏まえ、学部別の授業研究を通して研究を進めた。

まず、教師の授業づくりの思考のプロセスにもなる指導案の様式について改訂を行った。これまでと大きく変更した点は、育成を目指す資質・能力の3つの柱で単元の目標及び単元の個人目標の設定を行うようにしたことと、単元の目標に準拠した3観点の評価規準を設けたことである。

指導案の単元の目標は前述のとおり、これまでは各教科の中心的なものを1つ設定するようにしていたところを、育成を目指す資質・能力「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力人間性等」の3つの柱に沿って目標を設定することとした。これまでは「〇〇の思いをもって演奏する」「〇〇について考えて発表する」などの目標設定が多く見られた。「思いをもつことができる」「考えることができる」ことをねらっているのか「演奏することができる」「発表することができる」ことをねらっているのかの混同が見られ、評価の段階で苦慮することが多かった。そこで、今回の指導案の様式改定により、3つの柱に沿った目標設定を行えるように改善を図った。

また、これまでは目標自体を行動目標の形式で示すことで、見取りの規準の意味合いをもたせていたため、「〇〇について考えて発表する」などの目標が多かったが、今回、評価規準を設定したことにより、目標自体で、学習指導要領の目標や内容にも示されている「思い浮かべることができる」や「〇〇を工夫することができる」などの表現ができると考えた。なお、「知識及び技能」などの目標自体が児童生徒の行動として見取ることができるものである場合は、目標の「～できる。」を「～している。」と文末の変更をすることで、評価規準とすることとした。

3つの柱に沿った目標設定や、評価規準の設定により、評価についても大きく変更することとなった。これまでは、単元終了後の評価をする段階において3観点別に記述することとしていた。単元の終了時に児童生徒の活動の様子を想起し、「思考・判断・表現」の観点においては、その行動がどのような内面の育ちの表れであるかを改めて考察した上で評価を記述していかなければならなかった。その困難さが、「『思考・判断・表現』の評価が難しい」ことにつながっていたと考えられる。今回は、事前に評価規準を設定することにより、児童生徒の内面の動きと行動との関係性を整理した上で、学習活動を見ることができるよう、単元の中の児童生徒の姿からの評価が、目標からの自然な流れで行うことができると考えられる。また、規準として想定しているような活動や行動が見られる時などに、「なぜ〇〇したの?」「今、どんな気持ち?」など、児童生



5. 単元の計画（全○時間）

次	時	日時	学習内容	指導内容（学習指導要領か学習内容表から）

6. 単元の個人目標（各教科等，学部段階，ア，イ，ウ）

（変更後 各教科等を合わせた指導）

児童生徒	個人目標	
A	教科等名	①(学部段階 ア)
		②(学部段階 イ)
		③(学部段階 ウ)
	教科等名	①(学部段階 ア)
		②(学部段階 イ)
		③(学部段階 ウ)
B	教科等名	①(学部段階 ア)
		②(学部段階 イ)
		③(学部段階 ウ)
	教科等名	①(学部段階 ア)
		②(学部段階 イ)
		③(学部段階 ウ)

ア知識及び技能      イ思考力，判断力，表現力等      ウ学びに向かう力人間性等

7. 本時のねらい→目標（各教科等，ア，イ，ウ）

- ・・・・・・・・・・・・・・・・（国，ア）
- ・・・・・・・・・・・・・・・・（国，イ）
- ・・・・・・・・・・・・・・・・（理，イ）
- ・・・・・・・・・・・・・・・・（○，○）

本時は単元内でも特に「思考力，判断力，表現力」の育成を目指した授業であるとし，「思・判・表」の目標を立てる。

ア知識及び技能      イ思考力，判断力，表現力等      ウ学びに向かう力人間性等

8. 本時の評価規準（各教科等，学部段階，ア，イ，ウ）

- ・・・・・・・・・・・・・・・・（国，イ）
- ・・・・・・・・・・・・・・・・（理，イ）
- ・・・・・・・・・・・・・・・・（○，○）

本時の目標に対応させて，評価規準を設定する。行動目標になっている場合は「～できる。」を「～している。」の文末変換だけでもよい。

ア知識・技能      イ思考・判断・表現      ウ主体的に学習に取り組む態度

9. 本時の個人目標（各教科等，学部段階，ア，イ，ウ）

児童生徒	個人目標
A	①・・・・・・・・・・・・・・・・（国，小2，イ）
	②・・・・・・・・・・・・・・・・（○，○，○）
B	①
	②

ア知識及び技能      イ思考力，判断力，表現力等      ウ学びに向かう力人間性等

**本時の目標や本時の評価規準踏まえ，さらに個人に応じて目標設定しているということで「評価基準」の機能をもつと考える。**

10. 本時の展開

時間	活動内容	指導・支援

11. 場の設定

12. 本時の個人目標の評価（各教科等，学部段階，ア，イ，ウ）

児童生徒	個人目標	評価	児童生徒の姿，次回に向けて
A	①・・・・・・・・ (国，中2，イ)		
	②		
B	①		
	②		

ア知識・技能      イ思考・判断・表現      ウ主体的に学習に取り組む態度

評価は○と△の2段階評価

13. 授業改善について（主体的，対話的で深い学びの視点から）

14. 単元の個人目標の評価（各教科等，学部段階，ア，イ，ウ）

（変更後 各教科等を合わせた指導）

児童生徒	個人目標	評価	児童生徒の姿，今後に向けて
A	教科等名	①(学部段階 ア)	
		②(学部段階 イ)	
		③(学部段階 ウ)	
	教科等名	①(学部段階 ア)	
		②(学部段階 イ)	
		③(学部段階 ウ)	
B	教科名	①(学部段階 ア)	
		②(学部段階 イ)	
		③(学部段階 ウ)	
	教科等名	①(学部段階 ア)	
		②(学部段階 イ)	
		③(学部段階 ウ)	

ア知識・技能      イ思考・判断・表現      ウ主体的に学習に取り組む態度

評価は○と△の2段階評価

15. 単元について気付き・意見・今後に向けて

以上のような指導案様式の変更を行った上で、授業実践を踏まえながら、(1)で明らかになった「思考力、判断力、表現力」の育成に関する課題への解決を探るべく、今年度10月からは、学部別に授業研究を行うこととした。

なお、各学部でどの授業を取り扱うかについては、「思考力、判断力、表現力」の育成に関する課題の整理を学部縦割りの教師グループで行ったこと、次年度はまた学部を縦割りしてグループで研究に取り組む予定であることを踏まえ、学部ごとに決定するのではなく、学校で統一することとした。「①教科別の指導の国語科や算数科（数学科）」「②教科別の指導の音楽科や体育科（保健体育）や図画工作科（美術科）」「③各教科等を合わせた指導の生活単元学習」の指導形態や教科のいずれかを選択することとした。選択するにあたっては、(1)の課題解決を見据え、授業研究に有効となる点や難しくなる点などについて明らかにしながら、検討した（表9）。

表9 授業研究に有効となる点や難しくなる点

①教科別の指導の国語科や算数科（数学科）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・教科の見方・考え方を働かせる「思考力、判断力、表現力」をどう育成していくかという視点で、教材の工夫や発問の仕方を含む「指導・支援について」の検討が深められる。</li> <li>・学習指導要領で示された学力としての「思考力、判断力、表現力」を、一人一人の認知の特性に応じて捉え直して個人目標を設定することが求められる。</li> <li>・研究テーマ「生活を切り拓く」につながる児童生徒の生活との結びつきについては、検討が難しくなるのではないか。</li> </ul>
②教科別の指導の音楽科や体育科（保健体育）や図画工作科	<ul style="list-style-type: none"> <li>・学習指導要領で示される目標や内容は抽象度の高い表現であるため、評価規準の設定について、十分な協議を必要とする。</li> <li>・3教科とも生涯学習や、現在及び将来の児童生徒の生活と結びつけて、生活を切り拓くというテーマに向けた授業づくりを行いやすい。</li> <li>・児童生徒のすべての活動が、「表現力」として見なされ、安易な目標設定及び評価が行われてしまうおそれがある。</li> <li>・児童生徒が表現に至るまでに、「どのように考えたのか」「どのような理由により、どのように判断したのか、選び取ったのか」を、事前に構想し目標として設定する必要がある。</li> </ul>

③各教科等を合わせた指導の生活単元学習	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 現在及び将来の生活上の課題から単元を設定するので、生活を切り拓くというテーマに向けた授業づくりを行いやすい。</li> <li>・ 例年していたからという活動ありきの生活単元学習では、研究テーマに迫る提案内容を構成することはできないのではないか。</li> <li>・ 授業の展開では、児童生徒が自ら考え、解決方法を工夫したり、選択したり、決定したりする場面を設定しやすいのではないか。</li> <li>・ 選択や決定や判断に至るまでの、児童生徒の心の動きをどう読み解くかについての検討を深めなければならない。</li> </ul>
---------------------	--

今年度の授業研究の取組をどの指導形態や教科で行うかについては、以下のような意見を出し合いながら検討し（表 10）、「③各教科等を合わせた指導の生活単元学習」の指導形態で行うこととなった。

表 10 指導形態や教科を選択するにあたっての意見

①国語・算数（数学）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 単元計画段階で評価規準を設定するにあたって、国語・算数（数学）が考えやすいと思われる。</li> <li>・ 国語・算数（数学）で身に付けた「思考力，判断力，表現力」を，どのように将来の生活に役立てていくかということが考えやすい。</li> <li>・ 将来の生活において，相手の話の要点に注意して聞く力や，自分の考えを相手に分かるように伝える力はどの児童生徒にも身に付けさせたい力である。一人一人の特性に応じた手立てを試行錯誤することで「思考力，判断力，表現力」の向上を目指したい。その取組を国語の授業の中で行いたい。</li> <li>・ 言語活動の充実が求められている。その中心的に教科別の指導の国語を位置付け，そこで身に付けた基礎的な力が他の授業や活動で生かされるような取組を行いたい。</li> <li>・ 「思考力，判断力，表現力」の育成に関する課題のアンケートの中で，「説明する力・コミュニケーション力」が上がっていたので，国語科の授業で取り組みたい。</li> </ul>
------------	---

② 音楽・図工（美術） 体育（保健体育）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・「思考力、判断力、表現力」の育成に関する課題の整理の中で、表現の評価に偏りがちであるという課題が見えたので、児童生徒の活動や作品から思考や判断をどのように見取るかについてしっかり検討したい。</li> <li>・生涯学習を見据えた取組みは重要だと考える。</li> <li>・ICTを活用し、振り返り活動の充実を図りたい。その中で、児童生徒の「思考力、判断力、表現力」の育成を目指した支援の在り方を検討していきたい。</li> </ul>
-------------------------	---

③ 各教科等を合わせた指導（生活単元学習）	<ul style="list-style-type: none"> <li>・小学部では生活単元学習に毎日取り組むため、日々の子どもたちの思考・判断・表現の変容が見取りやすいと考える。</li> <li>・各教科等を合わせた指導は本校のカリキュラム上での位置付けが大きいので、授業研究を通して検討を深めるべきである。時数だけでなく、授業の質の向上を図りたい。</li> <li>・児童生徒自身が「自分の生活の中で今後生かしていけるように」という視点で、児童生徒に合った「思考力、判断力、表現力」の育成を目指した授業づくりができると思う。</li> <li>・「生活のニーズ」からの単元を組み、またはその考え方で試行的な授業づくりを行いたい。広く提案できる生活単元学習の授業づくりとしたい。</li> <li>・前期研究からの課題として、各教科等を合わせた指導と向き合っていくことが上げられていたため。</li> <li>・個別の指導計画の目標設定にも表れているが、教科別の指導と各教科等を合わせた指導形態の関連付けの課題にも取り組みたい。</li> <li>・児童が自ら考える、選択する、決定するなどの学習場面が設定しやすい。特に目に見えづらい「思考力」へのアプローチについて、子どもの段階に応じた手立てを検討していきたい。</li> </ul>
-----------------------	--

各学部の取組については、公開授業研究会における協議会の内容等も含めてまとめて行きたい（令和5年度4月中を目処に）。

## 各学部授業実践

### 小学部 生活単元学習「すきないきものにへんしんしよう」

小学部では、「思考力、判断力、表現力」に焦点を当てた授業づくりについて検討を深めるにあたって、小学部 A 組を対象として単元を設定することとした。

1 年生 3 名、2 年生 3 名の計 6 名 A 組の児童は、生き物に興味があり、5 月頃、校庭で採集した蝶の幼虫を育てる経験をした。どの児童も休み時間の度に虫かごを覗き込み、蛹に金色の光るとげがついていることや、蝶が羽化する様子を見て、身振りや言葉で驚きや喜びの気持ちを教師に伝えようとしていた。

そこで、秋の学習発表会では、学級で育ててきた蝶の成長についての発表を行った。さらに、蝶にちなんだ楽曲を用いた楽器演奏や、自分で制作した羽をつけ身体表現を行った。蝶になりきってステージを飛び回り、虫かごから蝶が空へ羽ばたいていった様子を自分たちなりに表現していた。また、展示物としてみんなで蝶のパネル作りに取り組み、最後まで協力し合う児童の姿が見られた。

このように、児童は授業の中で音楽に触れたり、制作活動に取り組んだりしながら、好きなものに対する思いや感じたことを、自分なりに表現する経験を少しずつ積み重ねてきた。その一方で、普段の生活の中においては、自分の思いを児童それぞれの方法・手段で表現しようとするのがまだ少ない。学校生活全体を通して、自分の思いを表現できるような経験を積み重ねていくことが重要だと考えた。

そこで、本研究授業では、好きな生き物が住んでいる世界をイメージした舞台上、自分で作った衣装を身に着け、音楽に合わせて生き物の動きを自分なりに表現する学習に取り組むこととし、単元を設定した。

本生活単元学習を計画するにあたっては、図画工作科と音楽科の小学部 1 段階及び 2 段階の内容から指導内容を選択し、育成を目指す資質・能力の 3 つの柱に沿って単元目標及び評価規準、単元計画を設定した。

#### 【単元目標及び評価規準】

教	柱	単元目標	評価規準
図画工作	ア	様々な材料に触れながら、教師と一緒に色をつけたり貼ったりすることができる。(小 1 段階)	様々な材料に触れながら、教師と一緒に色をつけたり貼ったりしている。
		様々な材料に触れながら、色をつけたり貼ったりすることができる。(小 2 段階)	様々な材料に触れながら、色をつけたり貼ったりしている。
	イ	好きな生き物を思い浮かべながら、材料を選ぶことができる。(小 1 段階)	好きな生き物を思い浮かべながら、材料を選んでいる。

	好きな生き物を思い浮かべながら、気に入った材料を選んだり、イメージに合った材料を選んだりして作ることができる。(小2段階)	好きな生き物を思い浮かべながら、気に入った材料を選んだり、イメージに合った材料を選んだりして生き物の衣装や舞台を作っている。	
ウ	自分から素材に関わろうとしたり、教師と一緒に作る活動に取り組んだりすることができる。(小1段階)	自分から素材に関わろうとしたり、教師と一緒に生き物の衣装や舞台を作ったりしている。	
	自分から素材に関わろうとしたり、作る活動に進んで取り組んだりすることができる。(小2段階)	自分から素材に関わろうとしたり、進んで生き物の衣装や舞台を作ったりしている。	
音楽	ア	音楽を感じて体を動かすことができる。(小1段階)	音楽を感じて体を動かしている。
		曲のテンポやリズムに気づき、音楽を感じて体を動かすことができる。(小2段階)	簡単なテンポの違いに気づき、音楽を感じて体を動かしている。
	イ	音楽を聴きながら、好きな生き物の動きを自分なりに体で表すことができる。(小1段階)	自分なりに音楽を聴きながら、好きな生き物の動きを体で表している。
		曲のテンポやリズムを自分なりに感じ取りながら、好きな生き物の動きを体で表すことができる。(小2段階)	簡単なテンポの違いを自分なりに感じ取りながら、好きな生き物の動きを体で表している。
	ウ	音楽を聴いて、自分から体を動かすことができる。(小12段階)	音楽を聴いて、体を動かすことができる。(1段階) テンポの異なる音楽を聴いて自分から体を動かしている。(2段階)

### 【単元計画】

次	学習内容	指導内容
1	好きな動物に変身しよう。 ・なりたい動物を決める。 ・舞台を作る。 ・衣装を作る。 ・好きな動物の動きを表現する。	図画工作科 表現 ・材料などから表したいことを思いつくこと。 ・想像したこと、見たことから表したいことを思いつくこと。 ・身近な材料を使い、貼ったり、形をつくったりすること。
2	好きな海の生き物に変身しよう。 ・なりたい海の生き物を決める。 ・舞台を作る。 ・衣装を作る。	音楽科 身体表現 ・音楽に気付くこと。 ・曲の拍やリズムに気付くこと。

	・好きな海の生き物の動きを表現する。	・音や音楽を感じて体を動かすこと。 ・拍やリズムを意識して身体を動かすこと。
3	お客さんの前で発表しよう。 ・リハーサルをする。 ・発表会をする。	
4	思い出シートを作ろう。	国語科 書くこと 図画工作科 表現

これらをベースにして、単元の個人目標を設定した。ここでは a 児について記述する。

図 画 工 作 科	ア	シールや毛糸などの様々な材料に触れながら、色をつけたり貼ったりすることができる。(小2段階)
	イ	好きな動物や海の生き物を思い浮かべながら、イメージに合った材料をそれぞれ選んで作ることができる。(小2段階)
	ウ	自分から様々な素材に関わろうとしたり、好きな動物や海の生き物の衣装作りや舞台制作に進んで取り組んだりすることができる。(小2段階)
音 楽 科	ア	曲のテンポやリズムの変化に気づき、音楽を感じて身体を動かすことができる。(小2段階)
	イ	曲のテンポやリズムを自分なりに感じ取りながら、好きな動物や海の生き物の動きを身体で表すことができる。(小2段階)
	ウ	音楽を聴いて自分から身体を動かすことができる。(小2段階)

実際の授業においては、第一次、第二次の1時目で好きな生き物を選ぶ際に、生き物への興味をもたせ、姿や動きのイメージを膨らませられるように動画を見る時間を設定した。a 児はこれまでにアニメや絵本で見てきた動物や海の生き物のイメージをすでにもっており、動画を見て「ウサギやイルカになりたい。」という気持ちをもつことができた。

生き物の衣装を作る活動では、イメージを表現できるような素材を自分で選ぶように、フェルトや羊毛やビニールなど、扱いやすく作成しやすい様々な素材を準備した。a 児は、衣装などの素材について、色々な素材を触ったり、教師と「ピンクの女の子のイルカはツルツルがいいな。」と話したりして、試行錯誤しながら選択する様子が見られた。試行錯誤を経て、うさぎではフェルトを、イルカではつるつる



図 11 生き物の動画を見る



図 12 衣装づくり

したビニールを使ったりして、生き物のイメージに合った材料を選んで作ることができた。

音楽を聴きながら好きな生き物になりきって身体表現を行う活動では、テンポやリズムに変化のある曲を準備した。音楽がなったことに気付いて体を動かし、教師と一緒に体を動かしたり、テンポの違いを感じ取り自分なりに生き物の動きを想像しながら表現できるように、教師が児童の動きを見ながら言葉かけや賞賛を行ったりした。



図 13 生き物になりきって

a 児は曲のテンポを感じ取りながら、うさぎが飛び跳ねる姿やイルカが水面を飛び跳ねる姿を体の動きで表現していた。テンポの変化に気付くと、移動やジャンプのスピードを自分で調節する姿が見られた。

毎時間の振り返り活動では、自分の様子や動きを確認できるように、電子黒板を活用して自分の活動の様子を画像で見る活動を取り入れた。a 児は自分の画像を見て笑顔になり、「また変身するのが楽しみ。」と発言するなど、達成感や期待感をもつ様子が見られた。

以上のようなことから、単元を終了しての、a 児の音楽と図画工作の「知識・技能」「思考・判断・表現」「主体的に学びに向かう態度」すべて、目標を達成できたと評価した。また、他の児童についても、概ね単元の個人目標を達成できたと評価することができた。

研究授業の「よかった点」「難しかった点」を以下のようにまとめた。

#### 【よかった点】

- ・好きな生き物から授業に発展させたため、児童が主体的に取り組むことができた。
- ・生き物の動きをイメージするために動画を活用することで、児童が「どんな動きがいいかな。」と自分なりに動画を見て考え、「この動きをしてみよう」と選択し、それを体全体で表現できた児童もいた。

#### 【難しかった点】

- ・本人なりに表現している姿を見ることができたが、そこからどんなことを児童が考えているかを見取ることが難しかった。
- ・実際の生き物を触ったことがない中で、素材をイメージすることが難しい児童もいた。
- ・「次の日はこうしてみよう」という活動のイメージを広げるような振り返りとするのは難しかった。

本研究授業では、児童が持っているイメージを衣装や小道具作り及び音楽を聴きながらの身体表現によって表現する力を高めることができたと考える。本単元に加えて普段から、本学級の児童が自分の思い付いたことを表現することを促したり、支援したりす

るような指導を心がけたことにより、今年度の終盤では休み時間などの普段の学校生活において、自分が思い付いたことを自分なりの方法で積極的に教師や友達に伝えようとする姿が見られるようになった。また、みんなの前で発表することに対し消極的だった児童も、自分から前に出ることができるようになってきた。

まだ低学年であるために、表現の手段は限られているが、今後も意欲的に表現する態度の育成を目指して、自分の思いを表現する楽しさを十分に味わうことができるような授業づくりを続けていきたい。また、この取組においては、児童が思考することについての教師間の検討は不十分だった。目標設定や評価規準の設定において、さらに検討を深めるとともに、今後も児童の好きなことや興味のあることから授業づくりを行い、児童が興味の幅を広げながら様々な経験を増やしていけるようにしていきたいと考える。

### 中学部 生活単元学習「パワー100%」

中学部では、2年生を研究授業の対象学級として授業研究に取り組んだ。本学級の生徒は、男子3名、女子2名の計5名が在籍している。穏やかな性格で互いの関わりは少ないものの、困っている生徒がいたらそっと手助けをする生徒が多い。障害の特性や認知等の発達状況は多様である。特にコミュニケーション面では、発語が難しく身振りや描画で伝えようとする生徒、これまでの経験によって話すことに自信がもてないでいる生徒、場面に応じて適切な言動をすることに困難さがある生徒等があり、言語での表現には個別の支援が必要である。

普段の授業では、落ち着いて学習に取り組むことができているものの、背中が丸まっていたり、足を投げ出して座るなど、姿勢の保持が難しかったり、疲れやすく体力の面からも集中を持続することが難しかったりする様子が伺えた。しかし、運動が全く嫌いという訳ではなく、昼休みに友達同士で遊んだり、自分にもできそうなことであれば、体育の授業で積極的に活動したりする姿が見られてきた。また、本学級の生徒たちは年間を通して、生活リズム・栄養・運動の3つの項目で自分の健康について考える学習に取り組んできた。

本単元では、体の各部位に注目し、その部分の筋肉を伸ばしたり縮めたりする動きを考える活動を設定して、これまでの学習と関連付けながら、自分の体に対する知識を深めると共に、自分の健康への関心を高め、普段の生活の中でも体を動かす機会を増やそうという意欲へとつなげていくことを目的とし、理科と保健体育科の内容を指導内容とすることとした。

【単元目標及び評価規準】

教	柱	単元目標	評価規準
理科	ア	人の体には骨と筋肉があることを知ることができる。(中2段階)	人の体には骨や筋肉があることを知ろうとしている。
	イ	人の体の各部位の動かし方や力の入れ方を考えて、自分の体を動かすことができる。(中2段階)	筋肉の力の入れ方や伸び縮み、関節の動かし方を意識しながら、自分の体を動かそうとしている。
	ウ	骨や筋肉の動きについて学習したことを、日常生活の動きに結び付けて、生かそうとすることができる。(中2段階)	骨や筋肉の動きについて学習したことを、日常生活の動きに生かそうという意欲を伝えている。
保健体育科	ア	健康な生活に必要な習慣や生活の中の運動の仕方を身につけることができる。(中1段階)	健康な生活に必要な習慣や、生活の中の運動の仕方を身に付けようと実践している。
	イ	日常生活の中の運動をイメージしながら、体の各部位を大きく動かすための工夫をすることができる。(中2段階)	生活の中の運動で、体の各部位をどう動かせばよいかを、自分で試したり、他者の意見を聞いたりして工夫している。
	ウ	健康的な生活を送ろうという思いをもち、進んで運動を行うことができる。(中1段階)	健康的な生活を送るために、学校生活の中でも運動しよう意識して表す場面が増えている。

【単元計画】

次	学習内容	指導内容
1	<ul style="list-style-type: none"> <li>・体を動かした経験について考える。</li> <li>・体を動かして可動域をチェックする。</li> <li>・いろいろな運動の動画を見る。</li> <li>・人の体には骨や筋肉があることを知る。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・人の骨や筋肉の動きや自分の体の可動域可動域(理科-中2)</li> <li>・体づくり運動(保健体育-中2)</li> </ul>
2	<ul style="list-style-type: none"> <li>・テーマにする体の部位を決める。</li> <li>・筋肉や骨の動きを確認する。</li> <li>・部位を動かしたり伸ばしたりする動きを考える。</li> <li>・動画を撮影する。</li> <li>・撮った動画を比較し意見を出し合う。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・人の骨や筋肉の動き(理科-中2)</li> <li>・条件を変えたいいくつかの運動、体の動きの違い(保健体育-中1)</li> <li>・体づくり運動(保健体育-中2)</li> </ul>
3	<ul style="list-style-type: none"> <li>・他学年に向けて上映会をする。</li> <li>・自分の生活の中で体を動かす計画を立てる。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・生活経験を基に体の動きを予想すること(理科-中2)</li> <li>・自分の健康のための活動(保健体育中1)</li> </ul>

<ul style="list-style-type: none"> <li>・単元の振り返りをする。</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・けがの防止(保健体育 - 中 1)</li> <li>＊健康な生活(体育 - 小 2)</li> </ul>
--	--

本学級生徒の「思考力、判断力、表現力」の育成を目指すにあたっては、①意欲②安心、③思考の3つをキーワードとして、具体的な支援について教師間で検討を行った。

### ①意欲

- ・生徒が楽しみながら体のつくりについて学べるように、クイズやゲーム形式を取り入れる。
- ・生徒が興味を持っている YouTube を取り入れ、「YouTuber になろう」というテーマで学習に取り組むようにする。
- ・体を動かしたくなるような BGM を準備する。

### ②安心

- ・チームのメンバーは男子と女子に分け、同じメンバーで活動を繰り返すことで、安心して生徒同士が協力したり工夫したりしやすい環境を作る。
- ・毎時(次中)の授業は同じ展開とし、活動の見通しをもちやすいようにする。
- ・他者に見られることの恥ずかしさを軽減するために、目隠しブースや変装グッズを準備する。

### ③思考

- ・1次の学習では、自分の体だけでなく友だちや教師の体を触り、人体の特徴に気づけるようにする。
- ・考えを整理しやすいように、対象とする体の部位を1か所設定して、毎時の動画を作成するようにする。
- ・「どちらの方がより全力(100%)の動きか」という視点で考えられるように、自分たちで作成した2本の動画を比較するようにする。
- ・体の動きを引き出すような、様々な道具を準備する。
- ・振り返りでは、具体的にどんなことに気づけたか、どんな体の動きを考えられたかなどについて、自分の考えを発表する場を設定する。



図 14 番号の札を上げたり，電子黒板を指さしてクイズに答える様子

体のつくりについて知る学習においては、電子黒板の画像を指さしたり、カードを提示したりして答えるようにしたところ、話し言葉による表現が難しい生徒も、楽しそうな表情でクイズに答える様子が見られた。



図 15 ブースや機材の準備をする様子



図 16 交代で撮影をする様子

テーマとする体の部位の動きの動画を作成する学習においては、毎回同じ手順で行うようにしたため、撮影機材や運動に使う道具などを自分たちで準備するようになった。

さらに、機材の使い方にも慣れ、交代しながら動画を撮るなど、一連の活動を自分達で進めることができるようになった。



図 17 ボールやダンベルなどいろいろな道具を使う様子

動きを考える場面では、いろいろな道具を持ってきて、実際に動いてみてどの部位が動いているか確認するなど、試行錯誤しながら取り組む様子が見られた。



図 18 友達の真似をする様子



図 19 二人で協力して行う運動

また、友達の動きを見て真似をしたり、2人で協力しながらするような動きを考え、友達にそれを伝えて一緒に行ったりしていた。

撮った動画を確認して意見交換する場面では、「もっと大きく動いた方がいい。」と気付いたことを友達に伝えたり、友達の動画を見て自分もやってみて確認する姿が見られた。

本研究授業では、生徒は授業展開の見通しをもって自分たちで活動を進めていた。動画撮影だけにとどまらず、準備や片付けなどの場面で積極的に行動する姿が見られた。さらに、考えた動きができるように友達に説明したり、動画を見比べて気付いた事を発言したりするなど、生徒が自ら考え、考えたことを表現する姿を見ることができた。本単元では、身体の動きとして思考していることの表現を求めているので、言葉で

の表現に苦手さを感じている生徒にも適していたと考える。生徒の表現が増えると、生徒が思考している内容を教師が見取りやすいということも実感した。

今後は、生徒が身に付けた知識や技能を生かして、考えたり工夫したりする場面をさらに広げていけるようにしたい。具体的には、「体育の授業において、自分の身体について意識を向けやすいように部位を具体的に示すなどの工夫をする。」「実態に応じたグループ別に行っている国語や算数で学んだことを生活上で生かすことができるように、学級での授業内でも取り入れるようにする。」「学校で学んだことや習得したことについての情報共有を家庭と密に行うようにし、定着や発展を狙って、家庭にも取組の協力を仰ぐようにする。」などの取組ができるのではないかと考える。

### 高等部 生活単元学習「学校改善プロジェクト」

高等部では、「思考力、判断力、表現力」に焦点を当てた授業づくりについて検討を深めるにあたって、1年生を対象として単元を設定することとした。本学級は、女子1名、男子4名計5名の生徒が在籍し、4名は中学部2段階の内容を中心に、1名は小学部23段階を中心に学習している。生徒一人一人の特性は様々で明るく元気な生徒が多い。

本校では、2月に児童生徒会選挙を行っており、高等部2年生は毎年この時期の生活単元学習として児童生徒会選挙に向けて学習を行っている。本学級の生徒の実態を振り返ってみると、入学当初は、担当した役割を果たしたり、決まりを守ったりして自分のことを中心に行動していたが、10月の就業・施設体験を終えた頃から、少しずつ身近なところで人が困っていると進んで話しかけたり、学校全体の集会の片付けを行ったりして、周囲の人のことを考えた上での主体的な行動が増えてきている。学部や学校全体のことに関心をもち、自分が学校の中心となって貢献していこうとする気持ちが芽生えてきた。

そこで、本研究授業では「学校改善プロジェクト」と題し、学校の課題に目を向け、その課題に自分たちなりに解決する方法を考える生活単元学習に取り組み、その後には2年生と協力しながら児童生徒会選挙活動に取り組むこととした。

単元の指導内容としては、社会の「社会生活に必要なさまの意義について考え、表現すること」、生活の「周囲の状況を判断し、集団生活の中での自分の役割と責任について考え、表現すること」、国語の「他者の意見や考えを聞いたり読んだりして知ることや、自分の考えや意見を生み出し、他者へ伝えること」を設定した。

【単元目標及び評価規準】

		単元目標	評価規準
社会	ア	よりよい学校生活にするために必要な役割や方法，仕方を知ることができる。	児童生徒会の選挙に向けた学習活動で，よりよい学校にするための必要な知識や技能を身に付けることができている。(中2段階)
	イ	学校生活をよりよくするために自分ができる役割を考え行動することができる。	よりよい学校にするために周囲の状況を判断して，自分ができることを考え，その手立てや方法を考え，表すことができている。(中2段階)
	ウ	よりよい学校生活について考えたことを，学校生活や社会生活の中で生かす大切さを自覚することができる。	身に付けたことや考えたことを学校生活の中で生かしながら，主体的に活動に取り組んでいる。(中2段階)
生活	ア	よりよい学校生活にするために簡単な役割を果たすための知識や技能を身に付けることができる。	簡単な役割を果たすための知識や技能を身に付けることができている。(小3段階)
	イ	自分でできる簡単な役割を選ぶことができる。	集団活動に進んで参加し，簡単な役割を果たすことができている。(小3段階)
	ウ	自分の身の回りにある学校やその生活に目を向けて生活を豊かにしようと活動することができる。	学習活動に進んで参加し，身に付けたことや考えたことを学校生活の中で生かす大切さを知ろうとしている。(小3段階)
国語	ア	理解したり表現したりする語句の量が増え，自分の考えを表す言葉として身に付けることができる。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・友達や教師との関わりの中で聞いたり，集めた資料を読んだりして，自分の言葉として身に付け，話したり書いたりしている。(中2段階)</li> <li>・身近な人との会話を通して，言葉には物事の内容を表す働きがあることに気付くことができている。(小3段階)</li> </ul>
	イ	見たり聞いたりしたことをもとに，学校生活をよりよくするために必要なことを考えて，相手に伝わるように書いたり，発表して伝えたりすることができる。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・見聞きしたことから，学校生活をよりよいものにするために必要なことを大まかにまとめながら，相手に伝わるように話の構成を考えたり，工夫したりしている。(中2段階)</li> </ul>

		<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 友達の話や発表を聞いて、絵や写真などを手掛がかりに、自分の伝えたいことを考えて、絵や写真を選ぶことや見聞きしたことについて当てはまる言葉や図を探している。(小3段階)</li> </ul>
ウ	言葉や様々な語句がもつよさに気づき、思いや考えを伝え合おうとする態度を習得することができる。	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ 友達同士で思いや考えを伝え合おうとしている。(中2段階)</li> <li>・ 友達の思いや考えを知ったり、自分の思いや考えを伝えたりしている。(小3段階)</li> </ul>

【単元計画】

次	学習内容	指導内容
1	学校の現状や課題を知る。 ○目安箱や意見書を準備し、設置する。 ○教師にインタビューを行う。	○意見を述べ合い助け合い協力しながら生活する必要性を理解しそのための知識や技能を身に付ける。  (生小3 社中2)
2	集まった意見を整理し、自分の意見をまとめる。 ○意見のカテゴリー分けを行う。 ○自分の考えや意見をまとめて、発表資料をつくる。	○見聞きしたことや経験したこと、自分の意見などについて内容の大体が伝わるように伝える順序等を考える。  (国小3, 中2,)
3	自分の意見を発表したり、友達の発表を聞いたりして、意見交換する。 ○自分の考えを発表したり、友達の考えを聞いたりする。 ○感想や意見を発表し合う。	○学校全体の生活をよりよくするための課題を見だし、その解決のために話し合い、合意形成や意思決定することで、よりよい人間関係を形成することができるようにする。  (特別活動)



図 20 目安箱の設置やインタビューの様子

まず、1次では学校の現状や課題を知る学習に取り組んだ。目安箱作成設置や意見書の準備などについては、それぞれが自分の役割を果たして活動に取り組むことができた。教師へのインタビューについては、教師の発言の中心を聞き取ってメモをとることが難しい生徒もいたが、教室に戻ってから、

友達と話し合っ、メモにまとめる様子が見られた。この取組によって、相手の話

を聞きながら、書くことという二つのことを一緒に行うことの難しさに改めて気付いた。今後の学習の中で適切に指導・支援していきたい。

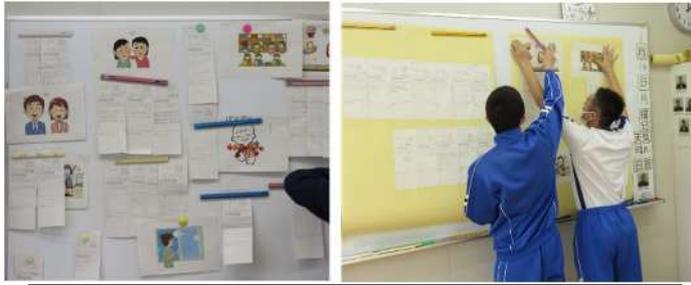


図 21 意見をカテゴリー分けする様子

次に2次では、集まった意見を整理し、自分の意見をまとめる学習に取り組んだ。

事前に教師が集まった意見を把握し、カテゴリーをイメージしやすいようにイラストカードを準備しておいた。生徒は1枚1枚読んで、意味や内容を読み取って、生徒同士で話

し合いながら、分類することができた。意見としては、小中高の学部間交流やあいさつ運動、校内の環境整備に関することなどがあった。分類した後、一人一人が自分の考える「よりよい学校生活」についてまとめ、発表準備を行った。意見を書く指導においては、「○○○な学校にするために○○○したい」というように目標や活動を明確にして表すようにした。



図 22 自分の意見を発表する活動の様子

3次では、自分の意見を発表したり、友達の発表を聞いたりして、意見交換する学習に取り組んだ。

授業のなかでの手立てとして、文字や言葉の理解が難しい

生徒には、イラストを活用して、



図 23 意見表出のきっかけ札

自分のやってみたいことや友達の意見でいいと思った活動を選択できるようにした。また、自分の思いがあっても、自分から言い出すことに消極的な生徒が多いため、意見表出のきっかけを作りとして、全員に「いいね」や「やってみて」「もっと教えて」という札を準備した。札を上げることはどの生徒もスムーズにでき、その後で言葉を選びながら、自分の意見を友達に伝えることができた。また、この授業を経てから、進んで友達や教師と話す姿が見られるようになった。

本授業研究の成果と課題としては以下のようにまとめることができた。

本授業研究の成果と課題としては以下のようにまとめることができた。

### 【成果】

- ・自分の考えの発表の活動では、意見に対し肯定的な内容の札を上げることがきっかけとして、全員が自分の思いを表現することができた。
- ・目安箱やインタビューなどにより、いろいろな意見を知ることができ、多角的な視点で自分なりの「よりよい学校生活」について考えることができた。
- ・実際の児童生徒会選挙活動では、2年生の考えに共感して、応援活動を行うことができた。

### 【課題】

- ・今後、具体的にどのようによりよい学校づくりを実現していくかについて、さらに友達同士意見交換をしたり、教師にも援助を求めたりしながら、継続的に考え続けていくことが求められる。
- ・友達と意見交換しながら意見内容を分類したり、札をきっかけに積極的に自分の意見を表現したりするなど、この単元を通して身に付けた力を、日常生活でも発揮できるように段階的に指導を行うことが必要である。また、話を聞き取りながらメモしたり、話の中心を聞き取ったりすることなどについても、計画的に指導していかなければならない。

今後、進級して社会へと巣立つ生徒たちには、新たな環境や新しい人との出会いがある。そこでは、自分の考えと他者の考えを整理して、自分の思いを表出することが求められる。これからも生徒一人一人のよさや思いを大切にしながら、周囲の意見や環境を受け入れ、柔軟に対応できる力が身に付くように指導・支援を行っていきたい。